論　文

地域生活支援のための介護福祉教育のあり方
－訪問介護実習を終えた学生の学びの状況からの一考察－（Ⅱ）

Ideal care worker education for local lifestyle support: A consideration on the state of education for students who have finished their care attendant practical training (Part 2)

石　橋　郁　子　　石　黒　康　子
ISHIBASHI Ikuko and ISHIKURO Yasuko

Ⅰ　はじめに

高齢化が進むなか、富山県では平成24年10月１日現在、65歳以上の人口が総人口に占める割合は27.5％で、全国平均の23.3％を上回っている。超高齢社会を迎えて、県内の65歳以上の人口は288,389人で、要介護（要支援）認定者数は50,738人と認定率は17.6％となる。

これら要介護認定者が利用する居宅サービスについては、平成25年度の訪問介護は、1,221,602回と平成24年度の1,147,524回の年間延べ利用回数を大きく上回り、訪問看護、通所介護（デイサービス）、通所リハビリテーション、短期入所生活介護等、全てにおいて年々上昇している。

筆者らは、地域生活支援に求められる介護福祉教育の課題を検討するため、本学福祉学科２年生が取り組んだ「訪問介護実習」の実習状況から生活援助や身体介護、訪問介護以外の在宅サービス、多職種連携、実習を振り返っての自己評価等、その結果を第１報として報告した。

本報では、第１報に引き続き「訪問介護実習」の状況から一人暮らし高齢者宅の同行訪問が多く、在宅支援のあり方と必要性が顕著になった結果を踏まえ、さらに今回は一人暮らし高齢者の支援内容と多職種連携についての状況を把握することとし、アンケート調査を行い、以下の結果を得たので報告する。

Ⅱ　調査方法

第１報と同様、本学科２年生の「訪問介護実習」の振り返りを基にアンケート調査を行った。

１．調査時期　　平成25年　６月28日
２．調査対象　　本学２年生51名（女子41名、男子10名）

いしばし　いくこ　　いしくろ　やすこ（福祉学科）

3．調査方法　　アンケート用紙を配布し、内容を説明した後記入してもらい51名全員回収する。

4．調査項目

（1）実習期間中の曜日による同行訪問の件数

（2）性別にみた一人暮らし高齢者宅の同行訪問件数

（3）性別にみた一人暮らし高齢者宅の同行訪問で体験した生活援助の回数

（洗濯・衣類の管理、調理・食事の準備、台所の清掃・食器洗い、冷蔵庫の整理・ゴミの始末、部屋の換気・部屋の清掃、トイレ・浴室の清掃、清掃用具の後始末・物品の取り替え、買い物代行・代筆）

（4）性別にみた一人暮らし高齢者宅の同行訪問で体験した身体介護の回数

（健康観察、起き上がり・車いす移乗、歩行介助、食事介助・水分補給、おむつ交換、トイレ介助・誘導、入浴介助・手浴・足浴、着脱介護・衣類交換、洗顔・口腔ケア、義歯洗浄、身だしなみ・整容・髭剃り、服薬介助・軟膏塗布・湿布貼付、外出介助・買い物付添い、通院付添い、散歩）

（5）その他の在宅サービスの体験

（訪問入浴、訪問看護、訪問リハビリテーション、通所リハビリテーション、通所介護、その他）

（6）多職種及び家族との連携

（ケアマネジャーとの話し合い・連絡報告場面に見学、多職種とのカンファレンの見学、サービス担当者会議の見学、訪問看護サービスとの話し合い・連絡報告場面の見学、訪問リハビリテーションとの話し合い・連絡報告場面の見学、家族との連携・話し合いの見学・その他）

（7）一人暮らし高齢者の訪問介護で大切と思うこと

5．倫理的配慮

2年生51人の学生に対して、研究の趣旨と口頭で協力の依頼を行った。得られたデータはすべて統計処理を行い、研究以外では使用しないことを説明し、承諾を得た。

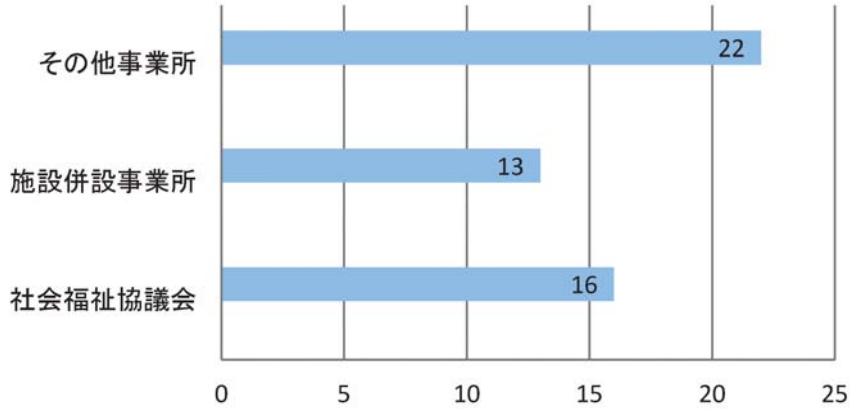
Ⅲ　結果及び考察

1．事業所別の実習状況

訪問介護実習での実習先の決定については、第1報と同様で事前に受け入れ調査を行い、学生数と居住地、通学方法を考慮している。

今回の実習事業所別にみた学生の実習状況を図1に示した。3つの事業所に対して第1報と類似した実習状況であるが、前回の結果と異なる点は学生数が若干増えたことと、男子学生については、社会福祉協議会事業所には1人も配属がなかったことである。

図１　事業所別実習状況　ｎ＝51　単位：人

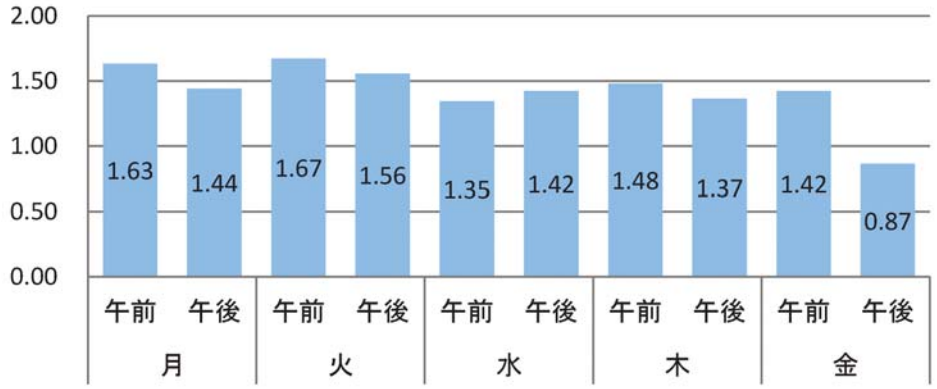


２．曜日による同行訪問の件数

担当訪問介護員と一緒に利用者の家に訪問する件数を、月曜日から金曜日の５日間において、１人当たりの曜日ごとにみたものが図２である。

今回は、水曜日、金曜日に訪問件数が若干ではあるが減少がみられた。この理由として、水曜日にデイサービスでの実習、金曜日は実習終了に伴う反省会を組み込まれることなどが挙げられる。また、訪問介護実習として、実習生１人当たり５日間の訪問件数は、平均14.5件で、最も多い学生で29件、最も少ない学生で１件であった。訪問件数の多い事業所は、社会福祉協議会事業所で、少ない事業所は施設併設事業所にみられる傾向があるが、実際、施設併設事業所でも21回実施しているところもある。訪問介護実習の目的である在宅福祉サービス機関の機能や、利用者の介護ニーズに応じた日常生活援助の方法を学ぶためには、１日２件から３件は同行訪問に取り組みたいものである。

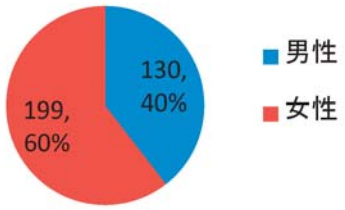
図２　曜日による同行訪問の件数（１人当たり）　ｎ＝51　単位：件



３．性別にみた一人暮らし高齢者宅の同行訪問件数

同行訪問先が一人暮らし高齢者については、全体で329件（同一高齢者の複数訪問を含む）であり、その内訳を性別で示したものが図３である。これより女性高齢者199件で60％を占め、男性高齢者は130件で40％であり、女性利用者の多いことがうかがえる。

図３　性別にみた
一人暮らし高齢者宅同行訪問男女数
ｎ＝329　単位：人



４．性別にみた一人暮らし高齢者宅の同行訪問で体験した生活援助

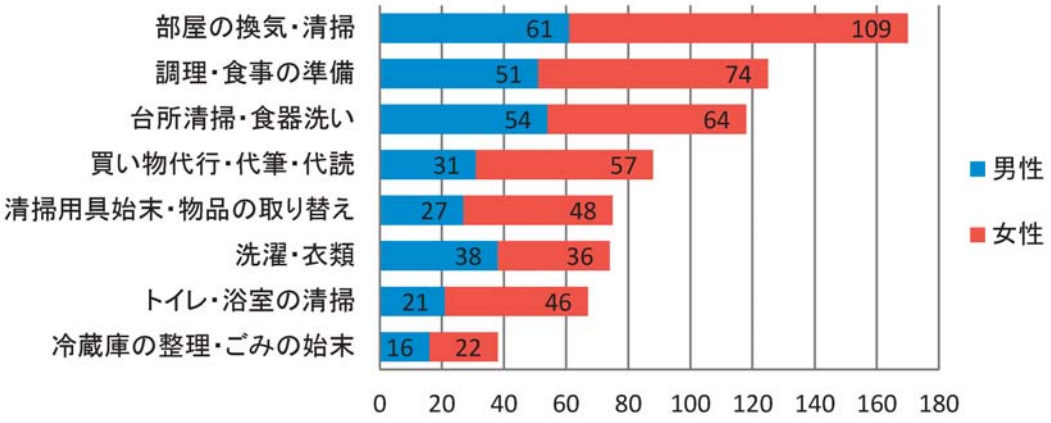
一人暮らし高齢者の同行訪問時で体験した生活援助について、体験回数を示したものが図４である。これより「部屋の換気・清掃」が総数170回で最も多く全体の22.5％を占め、次いで125回の「調理・食事の準備」が16.6％、118回の「台所の清掃・食器洗い」が15.6％、88回の「買い物代行・代読・代筆」が11.7％、75回の「清掃道具の後始末・物品の取り替え」が9.9％と続いた。

性別からみた生活援助の体験では、一人暮らし男性高齢者宅の「洗濯・衣類」の援助が38回で51.4％であり、一人暮らし女性高齢者宅の36回48.6％をやや上回ったほかは、一人暮らし女性高齢者の人数が多いため大差がみられなかった。「部屋の換気・清掃」の体

験回数が最も多かったのは、第１報の結果と同じであるが、「調理・食事の準備」「台所の清掃・食器洗い」が多いのは、一人暮らし高齢者として、健康の維持・増進、楽しみ等、食に関するニーズの重要性をしっかり受け止めなければならないと考える。

実習生は生活経験が乏しく、特に「調理」については、実習前からの不安要素となっている。これらの結果を踏まえて、ニーズに応えられるようバランスのとれた食事作りや、熱源が電子レンジのみの家庭における料理のレパートリーを増やすなど、より実践的な指導が超高齢社会においての在宅サービスを担っていく者として不可欠と思われる。

図４　性別にみた一人暮らし高齢者宅の同行訪問で体験した生活援助の回数
ｎ＝51複数回答　単位：回



５．性別にみた一人暮らし高齢者宅の同行訪問で体験した身体介護

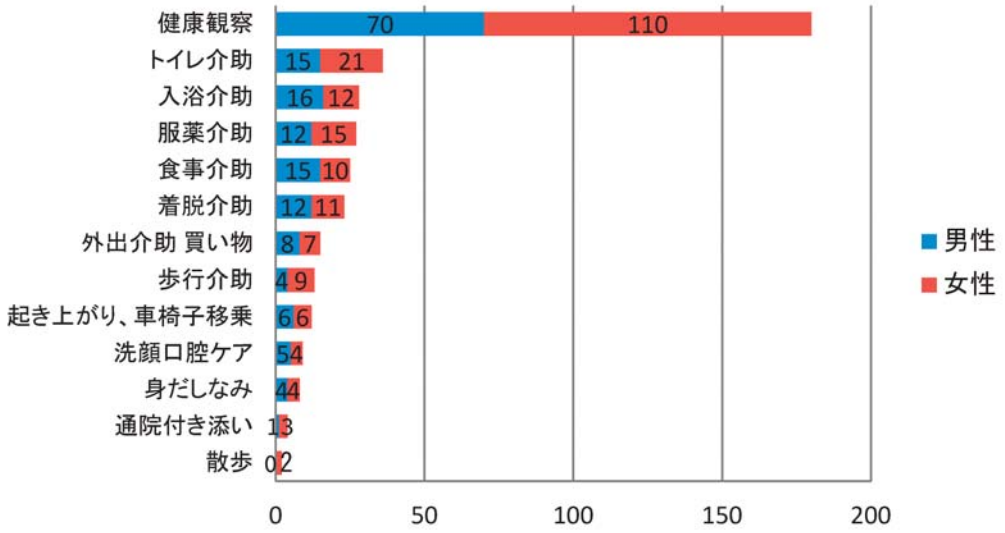
同行訪問で、体験した身体介護の内容と回数を示したものが図５である。体験した身体介護で最も多いのが「健康観察」で、13項目全体の47.1％と約半数近くを占めた。次いで多い体験は、36回の「トイレ介助」が9.4％、28回の「入浴介助」が7.3％、27回の「服薬介助」が7.1％、25回の「食事介助」が6.5％などであった。性別にみた身体介護の体験は、生活援助と同様で大差がみられなかった。

一人暮らし高齢者に求められる身体介護として、「トイレ介助」、「入浴介助」「食事介助」等の三大介護が上位を占め、高齢により身体機能の低下に伴う支援の必要性が顕著になった。

訪問介護員の仕事は、「身体介護」「生活援助」「相談・助言に関すること」に分けることができる。中でも「身体介護」の内容は、「生活援助」よりも身体的に直接関係する様々な点に注意しなければならない。一人暮らしのため、介助はもちろんのこと日々の生活の観察が重要になり、福祉用具・器具の活用で、スムーズな介助方法を考えるのも専門職の役割と考える。

図５　性別にみた一人暮らし高齢者宅の同行訪問で体験した身体介護

ｎ＝51複数回答　単位：回

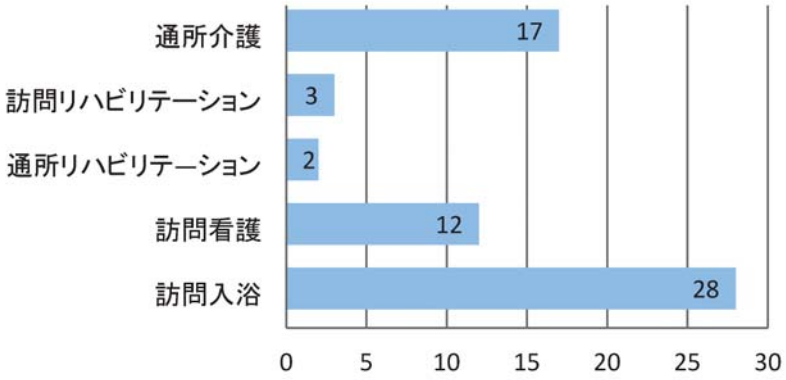


６．その他の在宅サービスの体験

一人暮らし高齢者宅における訪問介護以外の、在宅サービスの体験状況を図６に示した。「訪問入浴」の体験が28人と最も多く全体の45.2%を占め、半数以上の学生が体験をしている。次いで「通所介護」が17人で全体の27.4%、「訪問看護」が12人で19.4%であった。

第１報と同様「訪問入浴」と「通所介護」が多かったが、今回はさらに「訪問看護」の見学体験が多かったことが明らかになった。高齢者の一人暮らしということで、医療・福祉との連携は不可欠であり、住み慣れた地域で、在宅生活を支えていくためには、関連する相談窓口、業務を遂行する職種、機関の連携・協働の重要性を痛感した。日頃、学生は多職種連携について学んでいるが、実際に看護師や保健師が利用者宅を訪問して、療養上の指導や管理を行っている場面を見学・体験することは、貴重な経験となる。特に、「訪問入浴」については、家庭の浴室での入浴が難しい場合に、浴槽持ち込みの入浴介護を行うもので、見学・体験した学生は、プライバシーを守りながらスタッフのその手際の良さ、スピード、まさにチームプレイのすごさに感嘆していた。

図６　在宅サービスの見学数　ｎ＝51複数回答　単位：人



７．多職種・家族との連携の見学と体験

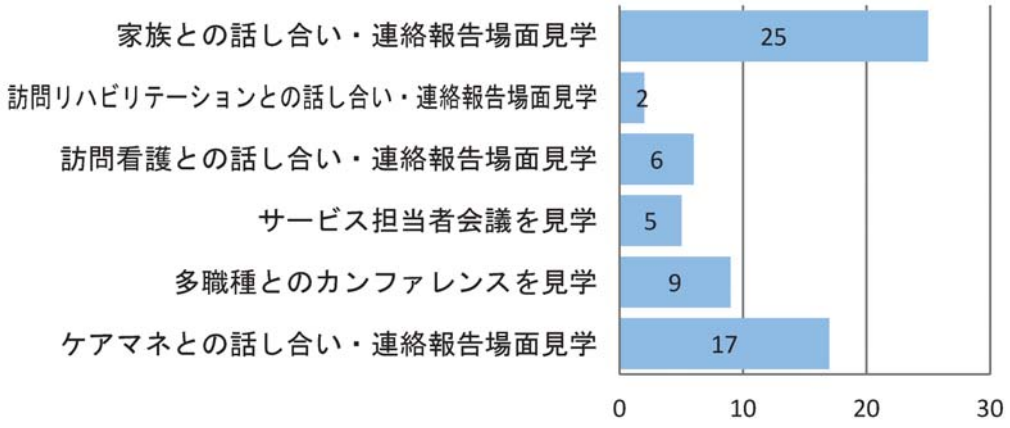
一人暮らし高齢者宅への同行訪問で、多職種や家族との連携見学を体験した学生数を図７に示した。

これより、「家族との話し合い・連絡報告場面見学」が最も多く、25人で全体の39.1％を占めた。実際は一人暮らしであるが、事業所からの相談ごとの助言や連絡事項の報告がある時は、独立している息子や嫁いでいる娘、兄弟など同席して話を聞く場面に、立ち会わせてもらっている。

高齢者といっても、多くは後期高齢者で中には、在宅での生活が困難を生じているケースも多々あり、家族との話し合いを聞く学生達にとっては辛い場面である。

しかし、これが実態なので利用者本位の支援には、「決してあきらめない」「できることから」「できるための工夫」が必要である。そのためには、フォーマル部門、インフォーマル部門の福祉ミックスを駆使していかねばならないが、介護保険制度だけでなく、インフォーマル部門をどう福祉政策に位置付けるかが地域福祉、高齢者福祉の重要課題と思われる。

図７　多職種及び家族との連携見学　ｎ＝51複数回答　単位：人

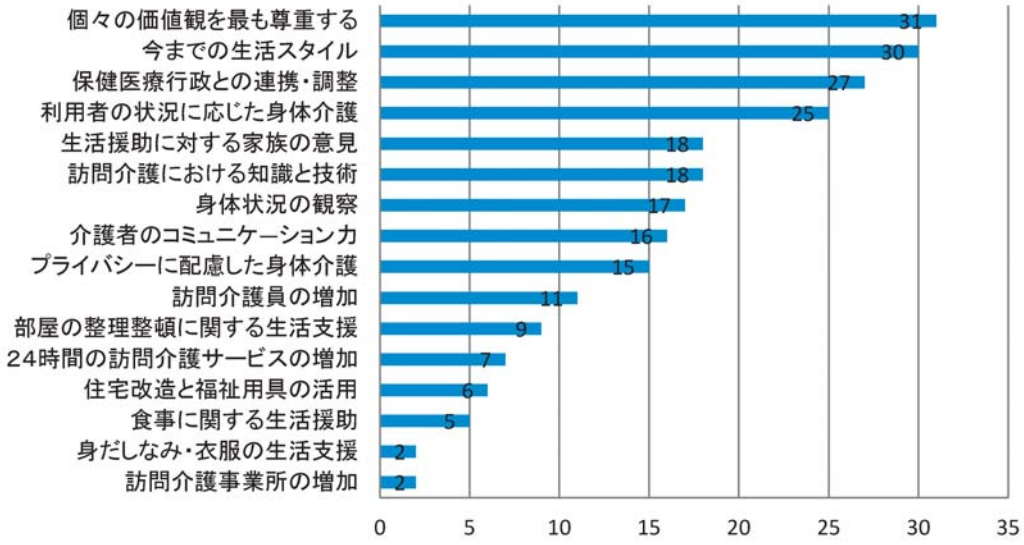


８．一人暮らし高齢者宅の訪問介護で大切と思うこと

訪問介護実習を終え、高齢や障害があっても地域において一人で暮らすための訪問介護のあり方で、最も大切と考える事柄を16項目設定し、学生１人当たり５つまで選び、多い順にまとめたものが図８である。これより、最も大切に思う事柄は、「一人ひとりの個別の価値観を尊重した支援が大切である」が31人で全体の13%を占めた。次いで「生活援助は今までのスタイルが大切である」が30人で12.6%、「在宅福祉に関する保健・医療・看護・行政との連携・調整が大切である」が27人で11.3%、「身体介護は、利用者の状況、障害の状態に応じた支援が大切である」が25人で10.5%、「生活援助は、利用者・家族の意見が大切である」と「訪問介護の実践には幅広い知識と技術が大切である」が同数の18人で7.5%を占めた。

これにより、一人暮らし高齢者宅の訪問介護で、大切と思う事柄について尊厳、生活援助、多職種連携、身体介護、在宅福祉サービスのあり方等それぞれ挙げられていたが、介護をするためには、どのようなサービス提供であれ、まずは利用者本位、利用者の尊厳を守る支援が大切という学生の思いの結果であった。

図８　一人暮らし高齢者の訪問介護で大切に思うこと
ｎ＝51複数回答　単位：人



Ⅳ　おわりに

昨年に続き訪問介護実習を終えた２年生に、アンケート調査を実施した。昨年の課題から、一人暮らし高齢者宅の訪問介護に焦点を当て分析を試みた。昨年度の調査では、一人暮らし高齢者宅の同行訪問件数が258件（同一高齢者宅の複数訪問含む）で、その内訳は、一人暮らし女性高齢者宅149件、一人暮らし男性高齢者宅109件であった。今年度は329件（同一高齢者宅の複数訪問含む）で、昨年から見ると71件（28%）増加している。内訳では、一人暮らし女性高齢者宅への訪問が50件（34%）、一人暮らし男性高齢者宅への訪問が21件（19%）と増加している。住み慣れた地域の中で、多少暮らし辛さがあっても自分らしい生き方で、また馴染みある住まいにおいて自立した生活を求めている高齢者がこれからも増加の一途をたどると考えられる。

訪問介護実習を終え、一人暮らし高齢者宅の訪問介護で大切にしていきたいことが「一人ひとりの個別の価値観を尊重した支援が大切である」で31人（13%）あり、個別の生活を尊重した在宅支援のあり方について、理解を深めた実習と捉えることができた。

今後の介護福祉教育の課題は、地域における認知症高齢者の増加や様々な生活障害を有する高齢者に対して、個々人の生活力や多様なサービスの利用と連携、在宅医療との連携など専門職として必要とされる在宅支援への学習を研究していくことが示唆された。

Ⅴ　まとめ

２年生による「訪問介護実習」の状況から一人暮らし高齢者宅の訪問介護に焦点を当て、支援内容や多職種連携等の調査を試みたところ、以下の結果が得られた。

１　学生１人当たりの曜日ごとの同行訪問件数については、水曜日と金曜日が若干減少していた。

２　一人暮らし高齢者宅の同行訪問件数は全体で329件あり、性別では女性高齢者が199件で60％を占め、女性利用者の多いことがうかがえた。

３　一人暮らし高齢者宅の同行訪問で、体験した生活援助は「部屋の換気・清掃」が最多の170回で全体の22.5％を占め、次いで「調理・食事の準備」が125回で16.6％、「台所の清掃・食器洗い」が118回で15.6％であった。

４　一人暮らし高齢者宅の同行訪問で、体験した身体介護は「健康観察」が最多の180回で全体の47.1％を占め、次いで「トイレ介助」が36回で9.4％、「入浴介助」が28回で7.3％であった。

５　一人暮らし高齢者宅での在宅サービス以外の体験については、「訪問入浴」が最多の28人で全体の45.2％を占め、学生の半数以上が体験していた。

６　多職種・家族との連携の見学と体験については、「家族との話し合い・連絡報告場面見学」が最多の25人で全体の39.1％を占め、一人暮らし高齢者を支える多職種の連携の重要性が明らかになった。

７　一人暮らし高齢者宅の訪問介護で、大切に思うことについては「一人ひとりの個別の価値観を尊重した支援が大切である」が31人で全体の13.0％を占め、次いで「生活援助は、今までの生活スタイルが大切」が30人で12.6％と、利用者本位、利用者の尊厳を守る支援が大切との結果であった。

Ⅵ　参考文献

１）富山県「高齢者保健福祉計画　第５期　富山県介護保険事業支援計画」計画期間平成24年度－平成26年度　富山県厚生部高齢福祉課　平成24年３月

２）富山県「高齢者福祉対策関係資料」　富山県厚生部高齢福祉課　平成25年３月

３）吉田節子・川島玲子・後藤真澄「ワークで学ぶ　介護実習・介護総合演習」株式会社みらい2011年４月

４）介護支援専門員テキスト編集委員会「改訂　介護支援専門員基本テキスト　第２巻　介護新サービスと介護サービス」財団法人長寿社会開発センター　2007年３月

（平成25年10月31日受付、平成25年11月15日受理）